朝日新聞
夕刊
朝日新聞大阪本社
大阪市北区中之島3-3-4
電話 06-231-0131 〒530-11
© 朝日新聞大阪本社1995

砂漠を走るトラック。ヘディンが「死の海」と呼んだ砂漠も開発が進んでいる

砂の海 轍くっきり

ヘディンから100年後のタクラマカン砂漠

関大隊、500キロ踏破

楼蘭遺跡の発見などで知られるスウェーデンの地理学者で探検家、スウェン・ヘディン（一八六五―一九五二）が中国西部のタクラマカン砂漠横断に失敗してから今年でちょうど百年。このヘディンの果たせなかった夢へ関西大学探検部の学生たちが挑戦、同砂漠南西部の踏破にどのほど成功した。一カ月かけて約五百キロを歩いた学生たちが見たのは、ヘディンが「死の海」と呼んだ砂漠とは少し違った風景だった。

遠征隊は現役の学生四人に探検部OB一人の五人。これに中国側五人が加わって合同のキャラバンを編成した。ラクダ九頭に水や食料を積み、九月二十八日に砂漠西部の町メルキトを出発、目的地ホータンまで、ヘディンが一八九五年に挑戦したコースをたどった。

道中、隊員たちが驚いたのは、コースの半分以上にトラックの轍（わだち）があり、資源開発の手が砂漠にも伸びている現状を目の当たりにした。

「トラックの走っている姿を見た時は正直がっかりしましたが、どれも現実」と隊長の野口伸也さん(30)。「逆に、地図のない時代にヘディンが歩いたコースが、現在でも理想的なルートとして使われていることが分かり、改めて彼の偉大さを痛感した」

トラックのルートから一歩離れると、そこはヘディンが見たのと同じ、目印のない砂一面の世界。GPS（全地球測位システム）や太陽電池などの近代的装備を用いて、隊員たちはヘディンの道を三十日間かけて歩き通した。

遠征隊は砂漠での風力、土壌なども調査。採取したデータは「砂漠緑化」の研究に使われる予定だ。

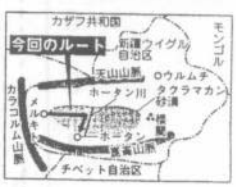
"安心きもの"時代を創造する
パールトーン®
お問い合わせは フリーダイヤル 0120-460714
東京都 名古屋 札幌

<第三種郵便物認可>

ラクダにつけた太陽電池のパネル。砂漠で威力を発揮、一日で充電

タクラマ
500キロ踏

関



このルートの踏破は市中訓練などを除き、民間人では記録がないという。

中国・敦煌の砂丘で、タクラマカン砂漠
向けた訓練をする関西大探検部員ら（今

キトへ。その後、砂漠に入り、砂漠中央部を南北に伏流するホータン川まで東進。そこから直角に同川沿いに南下する。出発から二十六日間で砂漠南部のホータンに到着する予定。砂漠研究に役立てるため、砂漠の土の採取なども行う。

ホータン川に出るまでの砂丘地帯が一番の難所で、ヘディンもここで道に迷い、断念した。部員らはG

南北四百キロの広さを約三十度過酷なレンジ一年以上大山など砂丘訓練野口

分に思わが魅せられ

昼夜の温度差20度超す シルクロード最大

タクラマ
踏破に挑

関西大探検部

100年前の先人の足跡たどり

シルクロード最大の難所といわれる中国・タクラマカン砂漠に挑んだ百年前の先人の足跡をたどりながら環境調査による国際協力をと、関西大学探検部（大阪府吹田市）は十四日、約一カ月の行程で四百五十キロを踏破する計画を発表した。一八九五年にスウェーデンの探検家、スウェン・ヘディン（一八六五―一九五二年）が達成できなかった計画をそのまま再現。道中、年旬に出発。砂漠の中心へ向かい東へ三百キロ、そこからホータン川に沿って百五十キロ南下

東西千二百キロ、南北四百キロの広さを誇るタクラマカン砂漠に挑戦するのは、関西大学タクラマカン砂漠踏破遠征隊の隊長、同大文学部三回生、野口伸也さん(20)ほか、女性一人を含む関大生四人とOB一人の計五人。

十九日に空路で大阪から中国入り。タクラマカン砂漠の西端の町、メルキトを今月下旬に出発。砂漠の中心へ向かい東へ三百キロ、そこからホータン川に沿って百五十キロ南下し南端の町、ホータンを終着点とする。ゴールにたどりつくのは来月二十六日ごろの予定。

この行程は、楼蘭の遺跡を発見するなどの功績で中央アジア考古学の巨人と呼ばれるヘディンが挑戦したが、砂あらしや昼夜の温度差が二〇度以上になるという厳しい気候、計路の誤認により、行程半ばで隊は壊滅、ヘディン一人がホータン川にたどり着いた。

過酷な条件を克服するため、関大探検部では、最新の衛星による位置測定機を導入したほか、昨年から訓練を続けて来た。

探検部顧問の川手昭平・関大工学部教授の話「タクラマカン挑戦は三回目だが、踏破は初めてのこと。砂漠は人間にとってとても厳しいが可能性も大きい。単に踏破するにとどまらず、文化交流や国際協力の懸け橋となってほしい」

全行程450キロ

朝日新聞社

中国 ウルムチ
タクラマカン砂漠
探検部
ノマカン砂漠へ出発

100年前に挑んだものの失敗を発見したスウェーデン関大の探検部が挑戦しま野口伸也隊長・20歳ほか4日に北京に向け出発。砂ルキトから南部の町ホー50キロを9月末から約1で横断する計画。部員らて1年以上も前から鳥取探を続けていました。

市内版

社会部　☎06(311)3111
豊中支局　06(857)2345
〒560 豊中市中桜塚2の31の12
東大阪支局　06(730)3244
〒577 東大阪市荒川3の26の25
枚方支局　0720(98)1499
〒573 枚方市宮之阪2の5の30の206
堺支局　0722(32)1072
〒590 堺市一条通1の23
泉佐野支局　0724(69)5571
〒598 泉佐野市若宮町10の16
広告のご用は　06(367)8201

タクラマカン砂漠踏破

関大探検部帰国報告

真っ青な空が印象的だった

スウェーデンの探検家スウェン・ヘディンが百年前に挑んだのと同じルートで、中国・新疆ウイグル自治区に広がるタクラマカン砂漠約五百キロの踏破に関西大（吹田市）の探検部員らが挑戦、成功し十八日、吹田市役所で帰国報告した。

茨木市玉瀬町、同大文学部三年生野口伸也さん(二〇)を隊長に男性部員三人、女性部員一人、OB一人が参加した。

九月二十八日に砂漠に入り、砂漠中央部を南北に流れるホータン川まで東進、その後川沿いに南下するルート。ラクダ九頭に荷物を積み、部員らは一日約十五キロのペースで三十日かけて歩き続け、先月二十五日帰国した。

「砂丘地帯に油田があり、予想外に開発されているのには少しがっかりした」と野口さん。日中三十八度までよじる気温や六十一百パーセントの高さの砂丘にさえぎられ、ペースがめっきり落ちた」。写真撮影などの記録を担当した香川史郎さんは「現地の様子は日本ではあまり知られていないはず。写真で多くの人に紹介したい」と話す。

副隊長の田口学さん(三三)は「さえぎるものが何も無い真っ青な空が印象的だった」。GPS（全地球位置測定システム）で方位を確認し、水分補給のためスイカを食べて歩き続けた部員らは「探検を支えてくれた多くの人に感謝しています」と話していた。

関大探検部のメンバー（左から）香川さん、野口さん、田口さん

ラクダ9頭に荷物を積み砂漠を行く関大探検部

タクラマカンへ

100年後のタクラマカン砂漠

関空から18日出発

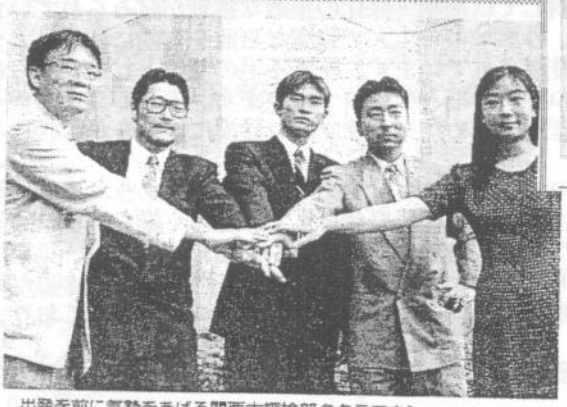
ことで知られるスウェーデンの探検家スウェン・ヘディン（一八六五―一九五二）が果たせなかった中国・新疆ウイグル自治区の砂漠踏破に、関西大学探検部の学生らでつくる遠征隊からちょうど百年。未踏破の四百五十キロをラクダを使って学生らは十八日北京に向け、関西空港を出発する。

遠征隊は隊長の野口伸也さん(二〇)をはじめ、田口学さん(三三)、香川史郎さん(三〇)の四人に探検部OB松原保さん(三〇)が総指揮役として加わる。中国科学院生物土壌砂漠研究所の協力も得て現地で砂漠研究者の趙元杰さん(三三)ら三人が合流。合同のキャラバンをつくる。

計画では九月末にタクラマカン砂漠西部の町ホータンを出発。砂丘地帯を三百キロ歩いて、伏流水のタン川に行きあたったらそこを南下。同川沿いに十キロ歩いて十月二十日、砂漠南部の町ホータンに着く予定。ラクダ八頭は、近い水や食料を積んで中で二回、中国側の補給を受ける。現地の最高温度は三五度、下五度とみている。

コースは、ヘディンが九百五十四月に挑戦した水不足のため失敗したのと同じ。ヘディンは砂漠を「死の海」という。ヘディンは後、楼蘭の廃墟を発見するまでの長くなる中央アジア地理学、考古学に貢献した。

遠征を発案した野口さんは「ヘディンの挑戦から百年、われわれの手を達成させたい」。一人の女性の本多さんは「シルクロードはあこがれの土地。男性との体力に不安はあるが、精いっぱいがんばりたい」と話している。



出発を前に気勢をあげる関西大探検部タクラマカン砂漠踏破遠征隊の隊員＝大阪府吹田市泉町1丁目で

『死の砂漠』踏破へ

関大隊が挑戦

ヘディンから100年目　18日、中国入り

幻の楼蘭王国を発見したスウェーデンの探検家スウェン・ヘディン（一八六五―一九五二）が中国・タクラマカン砂漠の縦断を断念して百年目にあたる今年、関西大学探検部の学生ら五人が同じルートで砂漠の踏破に挑戦する。全行程約四百三十五キロ。「死の砂漠」と呼ばれ、多くの旅人が命を落とした過酷な地だが、「偉大な探検家の残された夢を果たしたい」と意欲満々だ。十八日、中国に出発する。

ヘディンは一八九五年、同砂漠南西のメルキトからさらに南にあるホータンを目指し砂漠に踏み入った。しかし、高い砂丘が連なる行程は予想外に困難なうえ、道に迷い、用意していた水が枯渇、途中で引き返すことになった。

同砂漠は外国人の立ち入りが制限されており、その後、ヘディンのルートでの踏破の成功例はないという。

今回は砂漠の現地調査も兼ねて中国科学院が協力。日本側は隊長の文学部三回生、野口伸也さん(二〇)を含む男性部員三人、女性部員一人の五人で、中国側隊員を含め九人の合同遠征隊を組んだ。

社会部員、田口学さん(三三)、紅一点の文学部二回生、本多裕美子さん(二〇)の学生四人と同部OBの映像ディレクター、松原保さん(三〇)。日本人隊員の五人で、中国側隊員を含め九人の合同遠征隊を組んだ。

ヘディンから100年目にタクラマカン砂漠踏破に挑戦する関西大探検部のメンバー（左から）松原、野口、香川、田口、本多の皆さん

26日間かけ　全行程435キロ

遠征隊は今月末にラクダ八頭に食料や水を積んでメルキトを出発。途中、二回の補給を受けながら、一日平均二十五キロを進み、二十日目に到着する計画。

最高温度は三〇度近くになり、体力の消耗も激しいが、学生らは一年がかりで踏破訓練を積んできた。

旅の発案者でもある野口さんは「子供のころからのあこがれの地を楽しんで歩いてきたい」と話している。

「ヘディンの夢かなえたい」

関西大（大阪府吹田市）の探検部員らが今月末から、中国・新疆ウイグル自治区に広がるタクラマカン砂漠の南西部約五百キロの踏破に挑戦する。橋爛などの発見で知られるスウェーデンの探検家スウェン・ヘディンがちょうど百年前、ラクダに乗って挑み、失敗したのと同じルートを延長で

茨木市玉瀬町、同大文学部三年生野口伸也さん(二〇)を隊長に男性部員三人と女性部員一人。同部OBで東大阪市の映像ディレクター。一人約百万円の費用は

松原保さんらがサポート役として同行するほか、中国側からも生物土壌砂漠研究所の所員ら四人が参加する。

計画では今月十八日に日本を出発し、食料や燃料や現地での調達を行いながら

自分たちで工面した。

野口さんは子供のころから中央アジアやシルクロードにあこがれ、二年前から準備を進めてきた。

連絡を使って

回、中国補給を

PS（ヘテム）

18日出

探検家・ヘディンの

出発を前に気勢をあげる関西大探検部タクラマカン砂漠踏破遠征隊の隊員＝大阪府吹田市泉町1丁目で

ム漏れは、大、中、小規模